続西方の人

芥川龍之介

1　再びこの人を見よ

クリストは「万人の鏡」である。「万人の鏡」と云ふ意味は万人のクリストに倣(なら)へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に万人の彼等自身を発見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締め切日の迫つた為にペンを抛(なげう)たなければならなかつた。今は多少の閑(ひま)のある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、——殊(こと)にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは四

福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない。

2　彼の伝記作者

ヨハネはクリストの伝記作者中、最も彼自身に媚（こ）びてゐるものである。野蛮な美しさにかがやいたマタイやマコに比べれば、――いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさへ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味はさずには措（お）かない。しか

しヨハネもクリストの一生の意味の多い事実を伝へてゐる。我々は、ヨハネのクリストの伝記に或苛立（いらだ）たしさを感じるであらう。けれども三人の伝記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは独特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出来ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も当代には、up to date の手段をとつてゐる。ヨハネの伝へたクリストはマコやマタイの伝へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、荘厳にも優しいことは確かである。クリストの一生を伝へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の伝

記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの伝へたクリストは現実主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、――更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。しかし荘厳にも劬(いたは)りの深いヨハネのクリストも斥(しりぞ)けることは出来ない。兎(と)に角(かく)彼等の伝へたクリストに比べれば、後代の伝へたクリストは、――殊に彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を傷(きずつ)けるだけである。クリストは一時代の社会的約束を蹂躙(じうりん)することを顧みなかつた。(売笑婦や税吏(みつぎとり)や癩(らい)病人はいつも彼の話し相手である。)しか

し天国を見なかつたのではない。クリストを l'enfant に描いた画家たちはおのづからかう云ふクリストに憐みに近いものを感じてゐたであらう。（それは母胎を離れた後、「唯我独尊」の獅子吼（ししく）をした仏陀よりもはるかに手（た）よりのないものである。）けれども幼児だつたクリストに対する彼等の憐みは多少にもしろ、デカダンだつたクリストに対する彼の同情よりも勝つてゐる。クリストは如何に葡萄酒に酔つても、何か彼自身の中にあるものは天国を見せずには措（お）かなかつた。彼の悲劇はその為に、――単にその為に起つてゐる。或ロシア人は或時のクリストの如何（いか）に神に近かつたかを知つ

てゐない。が、四人の伝記作者たちはいづれもこの事実に注目してゐた。

3　共産主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共産主義的精神を持つてゐる。若し共産主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉（ことごと）く共産主義的宣言に変るであらう。彼に先立つたヨハネさへ「二つの衣服（うはぎ）を持てる者は持たぬ者に分け与へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我々人間は彼

の前におのづから本体を露《あらは》してゐる。（尤《もつと》も彼は我々人間を操縦することは出来なかつた、——或は我々人間に操縦されることは出来なかつた。それは彼のヨセフではない、聖霊の子供だつた所以《ゆゑん》である。）しかしクリストの中にあつた共産主義者を論ずることはスヰツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの為に。

4　無抵抗主義者

クリストは又無抵抗主義者だつた。それは彼の同志

さへ信用しなかつた為である。近代では丁度トルストイの他人の真実を疑つたやうに。――しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔(やはら)かである。静かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつても柔かである。……

5　生活者

クリストは最速度の生活者である。仏陀は成道(じやうどう)する為に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗礼を受けると、四十日の断食の後、忽(たちま)ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみづから燃え尽きようと

する一本の蠟燭（らふそく）にそつくりである。彼の所業やジヤアナリズムは即ちこの蠟燭の蠟涙（らふるゐ）だつた。

6　ジヤアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジヤアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼は大きい無花果（いちじゆく）のかげに年とつた予言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリストの上にも下つて来たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる**妥協**のもとに微笑してゐたであらう。

しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を与へてくれなかつた。それは受難の名を与へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の為に永久に若々しい顔をしてゐるのである。

7　クリストの財布

かう云ふクリストの収入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミア

ン？――我々はここにもクリストの中の共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまま、明日のことを顧みなかつた。「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の収入を扶（たす）けたことであらう。彼のジヤアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市価を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、――現にアメリカ聖書会社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

8　或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の伝記作者の一人、――ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿（みや）にて遇（あ）ふ。彼教師の中に坐し、聴き且（かつ）問ひゐたり。聞者（きくもの）其知慧（さとき）と其応対（こたへ）とを奇（あや）しとせり。」それは論理学を学ばずに論理に長じた学生時代のスウイフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀（まれ）ではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼

は存外平気に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど両親は其語れる事を暁(さと)らず」と云ふのも恐らくは事実に近かつたであらう。けれども我々を動かすのは「其母これらの凡(すべて)の事を心に蔵(と)めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖霊の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の為にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人気のない夜

中に突然彼女を驚かした聖霊の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの気もちは幼いクリストの中にも漲（みなぎ）つてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。

9　クリストの確信

クリストは彼のジヤアナリズムのいつか大勢の読者の為に持て囃（はや）されることを確信してゐた。彼のジヤアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた為

である。従つて彼は又最期の審判の、――即ち彼のジヤアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時々は動かずにゐなかつたであらう。しかし大体はこの確信のもとに自由に彼のジヤアナリズムを公けにした。「一人の外に善者はなし、即ち神なり」――それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の為に戦ひつづけた。この確信は事実となつたものの、勿論彼の虚栄心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未来を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人と

云ふ言葉に対して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば。

……

10　ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を観(み)よ。我に後(おく)れ来らん者は我よりも優(まさ)れる者なり。」――バプテズマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと伝へられてゐる。壁の上にストリントベリイの肖像を掲げ、「ここにわたしよりも優れたものがゐる」と言つた、逞(たくま)しいイブセンの心もちはヨハネの心もちに近

かつたであらう。そこに茨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたかは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆららかに星を撫でてゐるやうに。……

11　或時のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以

てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を与へる為ではない。彼も彼等と変らない「人の子」だつたことを感じた為におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を観よ」と言つたのよりも荘厳である。平和に至る道は何びともクリストよりもマリアに学ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリツク教はクリストに達する為にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直ちにクリストに達しよ

うとするのは人生ではいつも危険である。）或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂ニウス・ヴアリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

「お前たちはもう綺麗になつた。」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望（或は彼の虚栄心）の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事実上逆説的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

12　最大の矛盾

　クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも関らず彼自身を理解出来なかつたことである。彼は庭鳥（にはとり）の啼（な）く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理解することはこの為に一々彼の所業を「予言者Ｘ・Ｙ・Ｚの言

葉に応（かな）はせん為なり」と云ふ詭弁（きべん）を用ひなければならなかつた。のみならず畢（つひ）にかう云ふ詭弁の古い貨幣になつた後はあらゆる哲学や自然科学の力を借りなければならなかつた。クリスト教は畢竟（ひつきやう）クリストの作つた教訓主義的な文芸に過ぎない。若（も）し彼の（クリストの）ロマン主義的な色彩を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文芸であらう。

13　クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か？」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジヤアナリストであると共にジヤアナリズムの中の人物――或は「譬喩（ひゆ）」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だつたと共に、「新約全書」と呼ばれてゐる小説的伝記の主人公だつたのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事実を発見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隠れ得ざりき。」――かう云ふマコの言葉は又他の伝記作者の言葉である。クリストは度たび隠れようとした。が、彼のジヤアナリズムや奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ赴（おもむ）いたのもペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は橄欖（かんらん）の林だの岩の山などを愛したであらう。しかもジヤアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。

けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身を愛したのは疑ひのない事実である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人々は沢山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか？」と言つた。この名声の高まると共に自ら安じない心もちは我々にも決してない訣（わけ）ではない。クリストは名高いジヤアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懐がつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語らせてゐる。フアウストの第二部の第一幕は実にこの吐息の作つたものと言つても善（よ）い。が、フアウストは幸ひにも艸花（くさばな）の咲いた山の上に佇（たたず）んで

ゐた。……

15　クリストの歎声

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言つた。この歎声も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリツクに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺

院にやはり彼の歎声を感ずるであらう。

「どうしてお前たちはわからないか？」――それはクリストひとりの歎声ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎声である。

16　サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだつた。彼等は今後も地衣類（ちいるゐ）のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は

彼等には正に当嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油断のない処世術を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴエンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

17　カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必しも

この憎しみは彼一人にあつた訣ではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或は妬んだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきららに袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意気地のない聖霊の子供を嘲つてゐる。燃えさかる松明の光りの中に。……

18　二人の盗人たち

クリストの死の不評判だつたことは彼の十字架にかかる時にも盗人たちと一しよだつたのに明らかである。

盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の為に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盗人は彼よりも更に妄想を持つてゐた。クリストはこの盗人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盗人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

「お前はお前の信仰の為に必ず天国にはひるであらう。」

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、――クリストを罵つた盗人には軽

蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、――サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に賛成してゐる。事実上天国にはひることは彼等には無花果や真桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

19　兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に彼の持つてゐたものは見え

なかつたのである。彼等は定めし肩幅の広い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし彼等を見おろし、彼等の所業を軽蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20　受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚栄心を持つて

ゐたものの、彼の肉体的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊《こと》に十字架を見守つてゐたマリアを眺めることは苦しかつた訣《わけ》である。が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の声を挙げた後も（たとひそれは彼の愛する讃美歌の一節だつたにもせよ）彼の息の絶える前には何かおほ声を発してゐた。我々はこのおほ声の中に或は唯死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「殿《みや》の幔上《まくうへ》より下まで裂けて二つになり、又地震《ふる》ひて岩裂け、墓ひらけて既に寝《い》ねたる聖徒の身多く甦《よみがへ》」つた。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふシヨツクを与へ

たであらう。（マリアの脳貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威厳を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釈を与へてゐるパピニさへこの事実はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺（あざむ）いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦馬脚を露（あらは）してゐる。クリストの死は事実上彼の予言者的天才を妄信した人々には――彼自身の中にエリヤを見た人々には余りに我々に近いものだつた。従つて又炎の車に乗つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その為にショックを受けずにはゐなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのショックに欺かれは

しなかつたであらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも伝はつてゐる。イエルサレムを囲んだ橄欖（かんらん）の山々を最も散文的に飛び超えながら。

21　文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の余りに文化人だつた為である。（彼の天才を別にしても。）彼等は大体は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。

哲学の盛んだつた摩伽陀国(まかだこく)の王子はクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧(むし)ろユダヤの罪である。彼はロオマの詩人たちにも遜(ゆづ)らない第一流のジヤアナリストだつた。同時に又彼の愛国的精神さへ抛(なげう)つて顧みない文化人だつた。（マコはクリスト伝第七章二五以下にこの事実を記してゐる。）バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝(らくだ)の毛衣(けごろも)や蝗(いなご)や野蜜に野人の面目を露(あらは)してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗礼に唯聖霊を用ひてゐた。のみならず彼の洗礼（？）を受けたのは十二人の弟子たちの外にも売笑婦や税吏(みつぎとり)や罪人だつた。我々はかう云ふ事実

にもおのづから彼に柔い心臓のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神経を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蛮な死を遂げるやうになつた。しかし野蛮なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの為に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の為に逆説的な悪戯（いたづら）を忘れなかつた。……

22　貧しい人たちに

クリストのジヤアナリズムは貧しい人たちや奴隷を

慰めることになつた。それは勿論天国などに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた為もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわけではない。狭い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は実にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間

の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「予言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる為に、――ジヤアナリズム至上主義を推（お）し立てる為にあらゆるものを犠牲にした。ゲエテは婉曲（ゑんきよく）にクリストに対する彼の軽蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。――我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

（昭和二年七月二十三日、遺稿）

底本：「現代日本文学大系　43　芥川龍之介集」筑摩書房
１９６８（昭和43）年８月25日初版第１刷発行
入力：j.utiyama
校正：野口英司
１９９８年６月１日公開
２００４年３月11日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。